

# ねこの

猫養通信

第 5 0 号  
平 成 十 五 年  
( 2 0 0 3 )  
1 ( 月 1 5 日 発 行 )  
( 年 4 回 発 行 )

## 猫養会の来し方行くえ

東 明 雅

猫養会が誕生したのは、昭和五十七年四月である。目白台下の松聲閣に集まった同志十五人は、前年開講されたACC（朝日カルチャーセンター）の「連句入門」の受講生の方々であった。

爾来、平成十五年の今日まで二十年間、私は一貫して会長を勤めて来たが、省みると、企画を立て、構想を練ることはできて、その実行、運営はその時々副会長さん、また役員の方々に負うことが多く、この点深く感謝する次第である。

ことに一昨年夏、思わぬ大病にかかったあと、一旦恢復はしたものの、以後は体調すぐれず、昨年からは大切な芭蕉忌正式俳諧にも出席できない有様である。

そこで、実は昨年十一月二十日、副会長の

青木秀樹さん理事の松本碧さんに、柏まで来ていただき、会長辞任の件について申し出て、説明のうえ了解していただいた。

ところで、先にも申し上げた通り、猫養会の発展は、私を支えて下さった三人の副会長の力によるところが大きく、その方々の功績を披露することが、即、猫養の発展の実態を示すことになるので、その一端を述べたい。

昭和五十七年から平成六年までの十二年にわたって、初代副会長を勤めていただいた秋元正江さんは、故楸邨の「寒雷」同人中の錚々であるという貫禄で、草創時代の会員の輿望を一身に集め、近代連句としての猫養の新しい作品の創造に会員とともに尽力され、その作品は当時の連句界を驚動させたものであった。いわば、私の近代連句の理論を作品として具体化していただいたもので、ここに猫養の原型が作られ、土台が完成したのである。

平成六年四月、旅行中、不慮の病に倒れ、今も入院しておられる秋元さんに代り、第二代会長を引き受けて下さった式田和子さんは、東奔西走の花形人生評論家であったが、講演依頼を断ってまで、猫養会の一切を完璧に取りしきって、不平がましいことは一言も申されなかった。

また、式田さんはいかにも江戸っ子らしいスカツとした人柄、すべての人にこまかい心遣いをしながら、決してそれを表に出さないやさしさにひかれ、ACCはいつも満杯。ひいては猫養の会員も激増、なかでも男性、と

くに、若い男性の増加が目立つようになった。これは大変なことで、それまでの猫養調に軽味（滑稽）を加えるものになり、より幅広い幅と厚味のある作風を生むことが出来た。

このように、現在の猫養会及びその作風を作り上げるには私とともに、お二人の副会長の方々の才能と努力とが大きかったことを思うにつけ、次の会長、副会長には、以上の猫養の歴史を熟知し、理解して下さる方に継いでいただきたいと思った。

幸い、現在、副会長をやって下さっている青木秀樹さんは、昭和五十八年に始まって今日も続いている電通連句部の会員で、私や秋元さんとは師弟関係にあつたし、同時に、式田さんの副会長時代には、事務局長としての運営を実地に行ない、現在にいたるまで美事にその才能と手腕を発揮されている。能力と言い、人柄と言い会長に最適任と思ひ、再三お願いして内諾を得た。

次に副会長として、私は佛淵健悟さんをお願いした。彼はまだ現役の忙しい身であるが、平成十三年、私とともに季語辞典『十七季』を編纂され、すでにACCでは講師として新人の育成にあたっておられる。

このお二人、それぞれの持ち味と能力を合わせることで、猫養会のさらなる発展、和の連句の隆盛に力をつくしていただきたい。

会長を辞しても、私の連句への思いは少しも変わらず、これからも体調を整えながら、ご一緒に連句を巻きたいと願っている。

頌春 二〇〇三年元旦

歳旦三つ物

東明雅

羊齒飾る雑書ひしめく古机

米寿傘壽の酌みかはす屠蘇

告天子ひねもす空に囀りて

東郁子

初日影米壽の夫と拝みけり

故郷くの慣はし守るお雑煮

マラソンは羊腸の徑馳せ抜けて

内田 麻子

草原の彼方の海や初日之出

羊の群に三朝の笛

ふらここの好きな幼娘来るならん

坂本 孝子

羊飼ふ賢者の杖に年立てり

六腑を満たし祝ふ七草

雪解川町の変貌映しるて

副島 久美子

初日の出牧の羊の数揃ふ

木々草々も改まる年

名乗上げ世界遺産を増やすらん

中田 あかり

謹直な水引羊御慶かな

窓辺白々遠き初富士

花いっぱい夢の未来を君の手に

市野沢 弘子

白朮火を廻せば何か見えて来し

月の残れる初空の町

羊の毛つきぎり刈りて放つらん

原田 千町

若水や空は菫の羊雲

読み初めとなる新聞の嵩

アトラクション春の祭典躍り出て

豊田 好敏

林立のビルを踏まへて初日かな

メールで受ける賀状数通

春鰯更にうま味の増すならん

蒲原 志げ子

老いの春壺中の天を樂しめり

賀状はみ出る羊一筆

恋盛り花を散らすも悔いなくて

第二十三回時雨忌正式俳諧

平成十四年十月十六日  
於 深川芭蕉記念館

次第

|    |        |     |       |
|----|--------|-----|-------|
| 一  | 序致め    |     |       |
| 二  | 序入り    |     |       |
| 三  | 配硯     | 宗匠  | 原田 千町 |
| 四  | 献花     | 脇宗匠 | 橘 朱鷺子 |
| 五  | 執筆呼び出し | 副宗匠 | 青木 秀樹 |
| 六  | 文台捌き   | 執筆  | 近藤 守男 |
| 七  | 俳諧興行   | 知司  | 峯田 政志 |
| 八  | 花前     | 副知司 | 日高 玲  |
| 九  | 献香     | 座配  | 橘野代々子 |
| 十  | 花の匂披露  | 座見  | 佐古 英子 |
| 十一 | 端作り    | 花司  | 八代 彌  |
| 十二 | 吟声     | 香元  | 松本 碧  |
| 十三 | 文台返し   | 配硯  | 秋山志世子 |
| 十四 | 作品奉納   | 同   | 鈴木千恵子 |
| 十五 | 納硯     | 同   | 武田 恭子 |
| 十六 | 挨拶     | 老長  | 豊田 好敏 |
| 十七 | 退席     |     |       |

奉納 俳諧之連歌

脇起り二十韻

|                  |        |
|------------------|--------|
| 塩鯛の歯ぐきも寒し魚の棚     | 翁      |
| 行く人もなき風の街        | 東 明雅   |
| たてよこの鍵のワードを解くならん | 橘野代々子  |
| お拜儀の長い母の友だち      | 豊田 好敏  |
| 穂薄の原一面を照らす月      | 青木 秀樹  |
| ロングスカート露にしつとり    | 八代 彌   |
| 地芝居のお軽の役を張り合ひて   | 松本 碧   |
| をんな捌きは芸術の域       | 峯田 政志  |
| カーレース新型エンジン付けて出る | 日高 玲   |
| ライン脾睨猫城の塔        | 橘 朱鷺子  |
| 旅人に夏曉の珠撒の鐘       | 秋山志世子  |
| 禁酒禁煙壁に貼るだけ       | 鈴木千恵子  |
| パーティーの戦に挑む親と子と   | 武田 恭子  |
| 二〇〇三年アトム生まれる     | 生田 常義  |
| 雪月夜巫女の流し目あてやかに   | 青木 泉子  |
| いけずへんねし悪は辛口      | 吉村 ちみこ |
| 海鳴がララバイとなるふるさとは  | 佛測 健悟  |
| 蝶もめぐるか碑の裏        | 浅賀 丁那  |
| 匂鯛の玉崩しに花満つる      | 原田 千町  |
| 太極拳に集ふ麗日         | 執筆     |

「深川や」 青島 ゆみを 捌

深川や小走りにゆく小六月  
 帯は大きな葉牡丹であり  
 青墨のにじみをつけて書くならむ  
 鸚鵡の貌を窓側に向け  
 いざよひに惹句ばかりの新刊書  
 女かなしき秋の逆髪  
 水澄めばいよかなしき罪を知り  
 表彰状が何故かむなしき  
 飛級は世間に押されしぶと  
 フラメンコでもシニアクラスが  
 法華一乗山深くして若葉なる  
 月をあざむく涼やかなひと  
 背をむけて見せてはならぬ鬼の面  
 憎し憎らし好きよ好き好き  
 戦へと駆けたる恋の紫雷改  
 「冬の旅」まだ返さないまま  
 異国籍なりて生きまし遠い国  
 海苔の缶詰床に重ねて  
 俳もあり蓬左の城は花吹雪  
 盃流し競ふ曲水

連衆 式田恭子 遠藤央子 佛淵健悟  
 横山わこ 八角澄子

「翁の日」 浅賀 丁那 捌

虹色の風立ちにけり翁の日  
 眼の中も枯るる蠅螂  
 ライプある波止場の煉瓦倉庫にて  
 土を選んで水を運んで  
 蘊蓄もすこし加へる衣被  
 月に足出す茂林寺の釜  
 お仲人囲炉裏恋しき頃を訪ひ  
 あたし天秤座のうまれの  
 環境にやさしいひとの一輪車  
 千本ノック伝説となる  
 伽羅琴の楽に送られ帰郷せり  
 何を呑んだか鮫鱈の腹  
 聖典にすべて許すと記されて  
 熱砂の丘を降る姫君  
 夏怒涛をのこは月の影砕き  
 茅台乾せば気障な科白も  
 とりどりの薬に頼るほどの老  
 燕注意の駅の貼紙  
 釣人のうつらうつらと花の中  
 槌音耳にかろきおそ春

連衆 下鉢清子 伊勢本如代 根津忠史  
 橋朱鷺子 小池啓子

「翁の忌」 市野沢 弘子 捌

大川に吾を呼ぶ声か翁の忌  
 冬の雷鳴る垂れこめし雲  
 千羽鶴小さき指からつぎつぎに  
 黄色い帽子かぶり直して  
 月上る道まっすぐに稲架の列  
 幼馴染と出会ふ火祭  
 鮭のごと君のもとへと泳ぎつき  
 今浦島の想ひさまさま  
 フアルセット吐息のやうに歌ひあげ  
 床屋の鏡壳を写して  
 冷麦に赤と緑の麺二本  
 老酒を酌む盃に夏月  
 長江を下る船旅なつかしく  
 ベッドの中の変らない癖  
 くつきりと出社の首のキスマーク  
 猫はすまして鎮座まします  
 石松の神田紅聞きにゆき  
 作業着で立つ風光る中  
 花吹雪横切り飛ばすフリスビー  
 競ふがごとく笑ふ山並

連衆 鈴木千恵子 山寄一恵 山本要子  
 峯田政志 棚町未悠

「桃青忌」

内田 麻子 捌

「立冬」

上月 淳子 捌

「溷東の女」

鈴木 美奈子 捌

三井寺の鐘なつかしき桃青忌

枯蠅の止る石垣

海外へ赴任の辞令渡されて

ノーベル賞今宵の月へ杯を上げ

宅配便で届く松茸

傷つくを恐れて恋の出来ぬ秋

遂にお前も姉さん女房

入れます八十才まで保険には

相撲取乗る小さき自転車

王手指し縁台将棋待つたなし

涼しき月の覗く下町

廃校が仏蘭西人の学校へ

音痴の男口説き巧みに

カメラアイ新婚旅行撮りまくり

朝の港の其処此処に猫

愛子さま童画展にてはにかまれ

風船とぼすビルの窓々

飛花落花ニュータウンなるモニュメント

弥勒遺蹟に立てるかぎろひ

連衆 松本碧 松原弘子 西田一枝 近藤守男

立冬や老いても持たん志

ごく薄塩に漬ける白菜

ミュージシャン雅楽の音色取り入れて

外国人にゆづられし席

さざ波の月の形は散り散りに

囃籠にはダイヤ仕込んで

威銃驚く振りし抱きつき

二人三脚腹は別々

支持率は気にしませんと云ひながら

すぐに埃の浮かぶ仏壇

相対性原理にならふ蝸牛

タンゴ華麗に薔薇照らす月

逢ひにくる彼ロボットの歩き方

酒が入れば猛獣となる

再婚に子連れ同士の急発展

待ち切れなくてむしる瘡蓋

着陸のドゴール空港雨しとど

欧州産の亀も鳴くなり

尾根ゆけば一樹静かに花散りて

窓を開ければ霞む山脈

連衆 梅田實 八代嫺 秋山志世子 青木秀樹

溷東の女に傘借る時雨かな

障子のかげに直す後れ毛

しづしづと新幹線は出でゆきて

紬の裂をブックカバーに

コーランのモスクに響く二日月

草泊にも銃を放さず

雁わたる下に隈無く土を掘り

カミオカンデに素粒子の夢

絵蠟燭かすかな風にゆらめいて

平氏の綺羅を舞へる幸若

短夜の喉駈けぬける酒の熱

月を掠めてかはほりの影

その名マリア母より甘く抱きけり

愛されるほど駄目になる奴

大つごもり別れし後の請求書

雪降り積もる山の静謐

出不精の座敷童は囀基に凝り

難流せば疾き泡沫

百歳の涙を拭ふ花衣

森の深きに珍しき蝶

連衆 坂本孝子 鈴木了齋 春名青卯 佐古英子

「しぐれ傘」 副島 久美子 捌

触れ合ふも多少の縁しぐれ傘 久美子  
 細き流れに散れる山茶花 玲  
 笛の音のひときは高く聞えきて  
 アンツーカーに並ぶ面々 鐵男  
 月光ヶに白熱の棋譜浮かび出し 路子  
 狙ひ撃ちする林檎囃む君 玲  
 仮縫のウェディングドレス鳥渡る 路  
 切り替へつかぬ起業経営 玲  
 四半世紀拉致されし子も親となり 路  
 自己増殖のミトコンドリア 路  
 紺碧海岸ウインドサーフィン林立し 男  
 放浪の画家仰ぐ夏月 男  
 麵麩のみで生きるに非ず夢を食ひ 路  
 パソコン下手でも恋はお得意 路  
 あれからの僕は腑抜けになりました 男  
 神の在り処を探すこのごろ 玲  
 号外は物理・化学ノーベル賞 久  
 むりやり下戸に飲ますうららか 玲  
 淡きものみな美しき花の雲 玲  
 遠足の子のめざす山並 男

連衆 日高玲 筒井紅舟 林鐵男  
 倉本路子

「時雨けり」 中田 あかり 捌

けぶりつつ四万十川の時雨けり あかり  
 隼よぎる袖の掛橋 曉巳  
 ニュートリノやつと捕へる豎穴に 芙紗  
 エンドレスにて流すCD 達子  
 月光にかざした両手見詰める児 俊子  
 真赤な林檎むけばときめく 達  
 ハロウィーン仮面はじやまな忍び合ひ 巴  
 度重ねたる恥の上塗 紗  
 飛行機に忘れた入歯あきらめる 巴  
 香奠返しのお茶がたまつて 達  
 托鉢に釣銭わたす夜店前 紗  
 蠅叩きにて指した弓張 巴  
 このあたり後家横丁の異名あり 達  
 小さい舟に多い船頭 紗  
 七光通じる筈と迫る奴 俊  
 ウエストサイド純な踊子 巳  
 中東の石油ねらひは腹の底 俊  
 蒼帝迎ふ準備整へ 里  
 山の辺の蔵出しの酒花盛 紗  
 衿にJAオレンジを売る 達

連衆 島村曉巳 根津芙紗 篠原達子  
 三木俊子

「石彫の」 日高 英二 捌

石彫の蛙も鳴けよ初しぐれ 英二  
 濡縁にかけ寄する手焙 千町  
 監督の子等をねぎらふ接戦に 豊美  
 ログのタオルを取換にけり かりん  
 産院に月の満ち欠けカレンダー 千寿子  
 抱きしめて来る秋の七草 幸雪  
 阿波踊幼なじみの大人びて 美  
 掛声だけの政治改革 町  
 お宝の箱を開ければ跡もなし 寿  
 浦島太郎の亀を待つ夢 ん  
 兄が欲し弟が欲しと笹粽 町  
 蚊遣をいぶす二階家の月 美  
 恋なんて難儀もんでござんすねエ 町  
 しがみ付いたる自転車の腰 雪  
 パチンコのラッキー・セブン止らない ん  
 どざりと物の落ちる神棚 二  
 婆さまのつぎ当て袋鬼蔦紋 ん  
 脚に祖国の土匂ひたつ 寿  
 養花天四百年を深志城 町  
 一眼レフを据ゑる糸遊 雪

連衆 原田千町 高橋豊美 登坂かりん  
 紺野千寿子 田中幸雪

「竹斎の」 吉村 めみこ 捌

竹斎の笠に散りそむ紅葉かな めみこ  
 びーびー聞こゆ田ひばりの声 好敏  
 裂織のタペストリーを贈られて 代々子  
 コーヒーカップ全部大ぶり 泉子  
 一筆箋並ぶ売店織き月 アンズ  
 鞍馬火祭肩がぶつかる 代  
 忍ぶ宿落鮎の骨抜いてやり ズ  
 けものとなりて感乱の刻 泉  
 黒石に無限の海の勝を読む 敏  
 滝に打たるる白の装束 ズ  
 初孫に味見させたりあやめ酒 敏  
 「あしたがあるさ」合はすハミング ズ  
 甲冑の夜ごと出歩く倫敦塔 代  
 月影凍る螺旋階段 泉  
 まやかしと知りつつジキルと又逢ひに 同  
 五臓六腑もみんな上げちゃう 敏  
 図書室の名物先生退任し 泉  
 おたまじゃくしの孵る公園 ズ  
 大仏へ善男善女花ふぶき ゑ  
 紙風船を膨らます児等 代

連衆 豊田好敏 橋野代々子 青木泉水  
 松島アンズ

「鳥啼く旅」 生田目 常義 捌

小春日も鳥啼く旅のころかな 常義  
 たがはず来る杜氏ひげ面 志げ子  
 兄弟でけん玉の技競ひみて やすこ  
 コントラバスの弓のひらめき 敬子  
 ボヘミアの切子に月の影やどり 一郎  
 葡萄を摘みて滴らす汁 敏  
 火の恋し貴方の恋し午後三時 志  
 すぐ泣く男だから可愛ゆい や  
 突然のお沙汰あたふたノーベル賞 志  
 ダイナマイトは永遠の輝き 常  
 岩魚釣竿をしまへば月上る や  
 類の蚊叩く高速予定地 一  
 森伊蔵\*二杯の酔ひのなにわ節 同  
 さらばバサラと疾るさむらい 志  
 やはらかに重みかけくる綾衣 や  
 尼耳立てて南無阿弥陀仏 志  
 青空に飛行機雲は伸び行きて 敬  
 白頭山に待たる雪解 一  
 ふらここに花の乙女の笑ひ声 敬  
 老情の夢を破るどんたく 執筆  
 \*鹿兒島芋焼酎の超高級品

連衆 蒲原志げ子 池田やすこ 須賀敬子  
 古賀一郎

執筆役を終えて 近藤 守男

原田千町宗匠より「執筆、執筆」と呼び上げられ、仮座より立ち上がって東明雅先生よりお預かりの文台を捧げ持ち執筆の座へと向った私は、稽古中歌膝でいためた右足の爪先がうまくあがり安堵した。執筆の座に就いてよりの文台捌きは悪戦苦闘の連続であったが、左右に居並ぶ宗匠はじめお役の方々のお援助のお蔭で立往生だけは免れた。作品の吟声については通りの悪い声故もつとも心を砕いた。暇さえあれば、日々「俺は川原の枯れ芒」を歌いながら声帯を調整したが、実際は緊張の為か声が擦れたりしてうまく行かなかった。

翁像へ作品を載せた文台を捧げて執筆の座に戻ったときは思わず「ありがとうございます。私の語が口をついて出た。私の執筆を支えて下さった明雅先生を始め皆様に対して！ 当日御都合でお見えになられなかった明雅先生御夫妻へ「正式」のビデオをお届けした。ビデオデッキのある御自身のお部屋へ招じ入れて下さり、奥様ともども炬燵に入って観せていただいた。「執筆の役をやってもらうのは連句というものを解ってもらおう為です。」という明雅先生のお言葉を胸に抱いて帰途についた。

時雨忌のビデオ囲みて師の炬燵 守男

## 連句雑感

青木 秀樹

先日、手打ち蕎麦が人気の店で、熟達した職人の蕎麦切りを眺めていた。切りははじめの三回くらいはゆっくり丁寧に切り、その後は腰でリズムをとって三十数回切って一休みする。決して手先で切っているのではない。切り上げた蕎麦を点検して、うまく切れたものだけをほぐして置く。この動作が繰り返される。快適なリズムを聞きながら、発句・脇・第三にはじまる連句みたいだなと思った。

連句に出会った時に指導者に恵まれたことが、私を連句にのめり込ませるきっかけになったと思う。よく連句はむずかしいと言われるが、初心の頃には少しもむずかしいと思つたことはなかった。むしろ楽しいと思つた。当時、先輩から「よく前句を読んで、そこから連想することを句にすればよい」と言われ、明雅先生からは「何か書いてくれれば直しようがある」と言われただけであった。あれはいけない、これはダメだといわれたことはなかった。自分流に発想したことを付け句にして、怖いもの知らずにどんどん出したことを覚えていく。

連句には式目がある。それは基本的な連句の規則と、よりよい作品をつくるために先人の残したノウハウからなる。はじめにその式

目を教えられなかったことが私には幸いしたと思う。前句への付け、打越からの転じにおいて自由な発想が展開を面白くする。式目に合うかどうかは捌が判断してくれる。初心者には自由に発想して、どんどん句を出せばよい。一巻の序破急などは捌の指示に従っていけば次第にその呼吸が分かってくる。

実際に連句を覚えるのは実作の場を通してであり、それぞれの人の進歩の状況に合わせて教えられることが望ましい。「猫養会式目の整理」(『猫養通信』第21号)などは実作を一年もやっていたれば少しずつ分かってくるもので、五年もやれば自然に身についてくる。

猫養会は明雅先生の指導を受け、連句の式目に明るく、座の文芸としての実作経験豊富な宗匠やベテランが多いことが特徴である。しかも先輩が後輩に連句のコツを教える美風がある。そのような環境の下で実力をつけていくのが猫養流上達法であろう。しかし、式目に自己流の解釈をつけ加えて、連句をことさらむずかしくする人がごく一部に見受けられることは残念である。

連句は文芸である。文芸であるからには、他の文芸と同様に個人の才能の差があることは当然である。長年やっても詩的発想の乏しい人は、式目を熟知していても優れた作品を生み出すことができない。学ぶは「まねぶ」であるとは言え、いつまでも「まねぶ」の域に留まっていたら進歩がない。創造性が

要求される場所である。

このところ連句協会の役員として、現在の連句界の指導的な立場の方々と交流することが多くなった。その幹部の多くが、俳句を中心とする結社の主宰あるいは代表者である。連句だけを専門にする結社・グループはむしろ小人数のグループに多い。全国大会などで他流の方と交流する機会が増えたが、指導者に恵まれず、明雅先生の著書を手引きにして連句を学んだという人も結構多い。

いま連句の普及・発展のためには、歌仙のような古い形式をやめ現代的な新しい形式を作るべしとか、式目を無視すべしとかの論を唱える人がいる。しかし、連句の普及・活性化のための正道は、きちんとした連句を巻く基本と詩的発想を涵養することが重要であると思う。

私たちは明雅先生に指導された連句の基本を守りつつ、「世態人情諷交詩」としての発想を磨き、面白い現代連句作品を作ることに専心すべきであろう。それが結果として、日本の連句界の質的向上に資することになると信じている。

四角にも丸にも見える今日の月 秀樹

前句をどう読むか悩ましい。いまは連句のむずかしさに苦しんでいる。



神楽坂連句会へようこそ

神楽坂！なんと粋な響ではありませんか。この響通りの神楽坂連句会を紹介します。

この会は秋元正江先生を師と仰ぎ文芸の香り高い連句を目指し、平成五年九月十八日にスタートしました。当日はお隣の赤城神社の秋祭で、華やいだ雰囲気の中気持ちの良いスタートだったのをよく覚えています。会場は地下鉄東西線神楽坂駅から三分の赤城社会教育会館です。一昨年の七月に百回記念を迎えましたが、その間一回も休まず八月を除く第三土曜日の十一時から始めています。時間は十七時までたっぷりあり歌仙を巻くこともしばしばです。また年一回泊りがけて百韻にも挑戦してきました。

世話役はご存知「連句の母」の倉本路子さんが一手に引き受けて下さり、やんちゃどもが、その暖かいお膝の上でたのしくあそんでいる風情の会です。かと思えば場所柄として、連衆が美妓の〇〇奴や箱屋の△吉に化けたりする茶目つ気もたっぷりです、笑いが絶えません。連句は「雅」と「俗」といいますが、正江先生の日も早いご回復を祈りつつ、教えて頂いた「雅」の気分もをたっぷり持った連句を目指し一同切磋琢磨しております。出席は大体二十名前後、三から四席に分かれ、いろいろ形式でたのしんでいます。放課後は、

また美味しいところだらけで楽しみは尽きません。

この会はいつでもどなたでも大歓迎です。ご希望の方はどうぞ倉本さんまでお申し出下さい。以下は年忘れをかね、兼題席題各二題で、一座が発しました発句です。

兼題「師走」

年来の研屋へ一升師走かな 篠原達子  
ひとがみな我を追ひ越す師走かな 倉本路子  
大声で電話が歩く師走かな 村田富美  
ボイジャーのなほ虚空航く師走かな 百武冬乃  
啼きやまぬ師走の山の鴉かな 峯田政志  
ゆくりなく晚鐘聞くや町師走 長崎和代  
身の丈の勘定し抜く師走かな 鈴木美奈子  
師走かな茶髪老人走りゆく 棚町未悠  
神楽坂師走の人の増えにけり 関口靖子  
宅急便師走の路地に消えにけり 三木俊子  
潮上ぐる木場の堀澄む師走かな 島村曉巳

兼題「聖樹」

神楽坂小体な店の聖樹かな 長崎和代  
聖樹立つ癌病棟のコンサート 棚町未悠  
梢まで光まとへる聖樹かな 鈴木美奈子  
星ともる嬰の枕辺の聖樹かな 竹田登代子  
灯ともればビルが聖樹となりけり 難波さえこ  
子の丈の聖樹灯すや小児棟 百武冬乃  
門前のビストロ聖樹燦々と 島村曉巳

聖樹灯し神に縁なき家族かな  
教会の聖樹に子等の集ひけり

倉本路子  
関口靖子

席題「調律師」

短日やレゲエで終る調律師 竹田登代子  
遠目ふと凧きくか調律師 篠原達子  
ブランドの外套を脱ぐ調律師 三木俊子  
調律師短かく奏で初時雨 長崎和代  
雪合戦子供にまじる調律師 村田富美  
調律師冬將軍と門口に 島村曉巳  
調律師の音のひびきや日脚伸ぶ 難波さえこ  
調律師きつと目をやる寒北斗 峯田政志  
調律師齢重ねしか息白し 梅田實

席題「消しゴム」

消しゴムのかす溜りをり漱石忌 竹田登代子  
消しゴムで消せぬ悔あり去年今年 倉本路子  
消しゴムに罅走りけり憂国忌 百武冬乃  
年忘れ消しゴム忘れ浅間描く 峯田政志  
気に入りの消しゴム失せぬ十二月 篠原達子  
寒昂模写に消しゴム使ひきり 鈴木美奈子  
羽子板の形の消しゴムおみやげに 難波さえこ  
消しゴムで紙破る子の息白し 三木俊子  
消しゴムでこすりこすりて古曆 村田富美  
水仙の構図または消しゴムで 関口靖子  
ベル鳴って消しゴムこする悴ける手 梅田實

以上 島村曉巳 記

馬場凌冬百回忌余話

根津 芙紗

去年、平成十四年九月二十四日、根津芦丈の俳諧の師である馬場凌冬の百回忌を、当地伊那の常圓寺洗心閣で修したことは、連句協会報に報告しておいたので、詳細はそちらに譲ることにして、ここではその後日談をひとつお伝えしたい。

追善法要の莊嚴さもさることながら、導師を勤められた方丈様の挨拶が素晴らしかったので、私はそのコピーが欲しくなり、恐る恐る申し出てみたら快くお渡し下さった。お渡し頂いたのは好いが、見れば下に掲載したようにすべて漢字ばかり。「えっ漢文ばかり」と思わず絶句していると、「これをアレンジしながら話したのですよ」と仰る。そして更に昔の円塾社のことなどをすらすらとお話になる。それによると戦前、円塾社の句会が改築前の洗心閣で行なわれていたこと、戦後の句会もここで行なわれていたことなど、まるで昨日のことのように話されるのである。先代、先々代の和尚さんが凌冬先生のお作りになった円塾社に参加されていたのである。常圓寺には凌冬の句碑があり、凌冬ゆかりの寺であることは承知していたが、ここまで関係が深いとは知らなかった。「よくご存知だなあ」とつくづく嬉しくなった。当時の常圓寺

は伊那谷の文化の中心地だったのである。方丈様に頂いた漢文、浅学の私には完全には理解できないが、禅味・俳諧味の溶合った深々とした味わいは通って来て、心の底から嬉しくなる。

馬場凌冬翁百回忌追善興行香語

十七字中蔵天地

花鳥風月更鮮新

今日百週追善苑

詠出無字真風光

恭惟

山門本月此日謹ンデ莊嚴道場

借香華灯燭 同音諷經摩訶般若波羅蜜多心

經・大悲心陀羅尼・舍利礼文 所集功德八吳

竹斎嚴岳凌冬清居士 相値テ馬場凌冬翁没後

百周年之展 芋庵連句会一同就尊前嚴修追善

法要 正与麼時報恩底・端的如何宣揚

唄

句作極妙入玄

作風透丈徹地



伊那・常圓寺



追善連句興行

伊那の井月 日高 玲

落栗の座を定めるや窪溜り 井月

井月の墓前にて 山頭火

お墓したしくお酒をそそぐ

お墓撫でさすりつつはるばるまゐりました

駒ヶ根をまへにいつもひとりでしたね  
供へるものとは野の木瓜の二枝三枝

馬場凌冬と同じ時代に伊那に生きた井上井月の墓所を伊那市太田久保に訪ねた。

井月は三十才の頃(安政五年頃)越後長岡から伊那の地に来て、驚くべきことだが、死すまでの約三十年間を庵も結ばず俳諧と放浪に終えたのだ。伊那谷の人々の温かい情けが井月に「窪溜り」という生活の座を許した。それに当時の俳諧の流行、文人墨客を篤く遇する風俗もまた重なる。武士だったららしい。凌冬との付合に

染めにける油単の紋の陰日向 井月

雪に絵をかかぬり杖の先 凌冬

返らぬは死に害ねたる不忠もの 井月  
食客として渡り歩く様が日記にある。

「そば馳走風呂有。」また「昼馳走一瓢に預る。」の後「黄昏に付き投宿。粗末。」と食事と酒、宿に終始した記述は細やかで切実。ふと、「四山の瓢」と俳諧に貧をやつした芭蕉が思われた。井月は生身の俳諧師の現実に臆する所が無い。口癖の「うまいなあ。千両、千

両。」の音が聞こえるようだ。

盃の用意も見ゆる雑煮膳

行き先に困り果てたり年の坂

墓所に少し離れ、農道脇の木の根方に先の落栗の碑がある。折しも田圃は熟した稲が黄金に輝き、遥かに駒ヶ根が青く望まれた。碑に隣りして山頭火の句碑。同じ魂が呼び合うのか、時代を経てこの伊那の窪溜りに近代の風狂の友が転がってきた。己が臍を慰撫するように墓石を撫で「いつもひとりでしたね」と。惟然、路通の面影が重なる。

「彼必ずこの道に離れず、取り付きはべるようにすべし。俳諧はなくてもありぬべし…」と芭蕉の言葉が遠い連山にリフレインした。



「窪溜り」の井月と山頭火の碑

事務局便り

◇猫養会4月例会(藤祭り奉納正式俳諧)

日時 平成十五年四月二十五日(金)

十二時より

(受付開始 十一時三十分)

場所 亀戸天神社

江東区亀戸三―六一―

03(3681)0010

正式俳諧終了後、二十韻興行

◇国民文化祭とつとり二〇〇二入賞

十月二十六日に開催された第十七回国民文化祭とつとり二〇〇二において次の作品が入賞されました。おめでとうございます。  
・鳥取県知事賞

半歌仙「たびら雪」の巻 松本 碧捌

◇猫養会会員名簿の修正

「転居」

北村良輔 杉並区西荻北二・一〇・三二二六

T167・0042 ☎は同じ

紺野千寿子 中野区南台四・五六・五

T164・0014

☎03(5328)8503

◇猫養基金に御協力有難うございました。

根津美紗 六万円 橋朱鷺子 一万円

近藤守男 一万円 (敬称略)

基金の口座 みずほ銀行新宿新都心支店

普通3376045猫養基金

## 季語の風景 6

佛淵 健悟

歳時記を愛用するのは、俳人や連句作者とは限らない。外国暮らしをする人で日本のことを忘れないようにするためとか、時候の挨拶がワンパターンにならないよう座右に置いてあるとか、お茶道具の銘を考えるのに重宝しているとか、色々である。

昔、お茶で道具の拝見を稽古している時、「お稽古用ですなんて判で押ししたようなことを言わないでなんとか仰ってごらん下さい」と先生にいつも言われていて、丁度その頃俳句を始めていた頃であり、歳時記の中の、臘月、淡雪、鳥曇、草萌、木葉木菟、草蛩、養虫、鵲、雁渡、時雨といった四季折々の優美な季語を茶碗や茶杓につけて答えてみると、「貴方はなかなか良い言葉を知ってらっしゃる」と褒められて嬉しかったのを思い出す。歳時記のお蔭である。もっとも、掛軸に「丸山応挙作で・・・」とやった時は哑然とされて、でたらめにも程がなければいけないことを知った。季節を大切に考えるという点で、茶も俳句も「貫道するものは一」である。

こうした目的はなくても、漠然とばらばらめくって楽しいという、これもまた立派な効用である。

連句の席ではばらばらとやりながら、季節、季節の流れ、そこから生まれる（かも知れない）

い）詩想を得たりする、この「ばらばら読み」は、ふっと、大般若会の転読を眺めているような不思議な気分がすることもある。

こうした創作姿勢は俳人には不実に見えるかも知れないが、写生のみでは追いつかない連句のひろがり、虚実縦横に使い分ける歳時記利用はむしろ自然である。

連句の付の手法を説いたものに各務支考の「三法七名八体」があり、用いる実作者も多と思うが、例えばこの三法、前句に向かう姿勢によって、〈有心付〉〈会釈〉〈遁句〉と分類される。私は一人勝手に「松・竹・梅」と読み替えているが、この部分は、俳句作者の季語の扱いにも通用出来る。

季語の本意・本情にまっすぐ向き合い、季語の喚起力を句のバネに据える句作、有季定型の枠組は守るが、季語の求心力に頼らないもの（というより、季語そのものがフィクション化しつつある現代、「季語に頼れない」と言った方が正しいだろう）、もう一つ、季語は入っただけでも単なる記号としてしか用いられないケース、と現代俳句の季語を軸に考えた場合の「松・竹・梅」の分類も出来る。

季語に対する姿勢の濃淡は、実は俳諧作品の中ではごく自然に起きてしまうことで、なじみの事例である。連句俳句のバリアフリー化が進み、両陣営の知見を共有しあえる新しい創造の雰囲気生まれる年になればと、そんなことを今年の初夢に願っている。

## ◇新刊紹介

別所真紀子著 「芭蕉経帷子」

新人物往来社 ㊦一九〇〇

芭蕉の臨終と葬儀の模様をフィクションに乗せて描いた見事な小説です。小説を読みながらこんなにも目頭が熱くなったのは久しぶりのことです。会報末尾での短い紹介では著者に失礼なことですが、芭蕉の道統に連なる連句人として、早急に、是非一読をお勧めしたい傑作であることをお伝え致します。

## 編集後記

(英二)

巻頭言の通り明雅先生が猫養会々長の職を退かれることになりました。組織を裁くのは芳の要ることなので、体調を崩された先生のご決意も止むを得ないことと思います。会長職を退かれたとしても当会の主宰であることに変わりはありませんので、例の恐ろしい慈眼をいつまでも変わらず光らせて頂きたいと会員一同お願いすることにいたしました。

季刊 「ねこみの通信」 第五十号

発行者 猫養連句会

編集人 日高英二 日高玲

世田谷区代田三一九一八

〒155-0033

印刷所

アート工業株式会社